

特集

子どもと土

土からの恵み

平田 智久



好奇心と土との出会い

子どもたちにとって「土・砂」は、大事な素材です。幼稚園でも保育所でも公園でも、子どもたちは土や砂に触れて遊び始めます。きつと土には子どもを引き寄せる魅力が潜んでいるのでしょうか。

好奇心は、虫探しや石見つけ、葉っぱや木の実集めに子どもたちを駆り立てます。そうした行動と同

じように、穴を掘ったり山にしたりと、何かに取りつかれたように、黙々と土に挑むこともしばしばです。もしかしたら、ずっと昔の先祖のDNAを引き継いでいるのかもしれない。

やがて子どもは土と水を混ぜたり、団子状に握ったり、丸めてみたりします。そうした土の形状の変化が興味の的になっていきます。いくつも団子を作って並べている姿もよく見かけます。土の魅力の

一つに自在に形が変化してくれる性質「可塑性」があります。大昔の人も身近な土に触れて、偶然「火で焼くと硬くなる」と発見したのかもしれない。

「文明は、土の可塑性によって生まれた」ともいえそうです。

そう考えると、子どもたちの好奇心と土との出会いは重要です。新しい文明を築いていく可能性を秘めていますから。

土の性質も、サラサラ、ネットリ、ザラザラ、シットリ、ドロドロ……と多様です。思いどおりの形にならなかつたり、思いがけない形と出合ったり、土はさまざまなた姿を見せてくれます。そうしたさまざまな姿に出合えることが、子どもの育ちに重要です。サラサラやドロドロに触れて、心地よさや気持ち悪さを感じ、もつと触っていたいか逃げ出したいとか考え、行動を起こします。その感じ方も、考える広がりも、行動の選択も、子ども自身の

感覚器官、思考力、行動力によるものです。つまりそれは「自分で感じ、考え、行動する」ことで、幼児教育のねらいそのものです。また、「生きる力」にもつながっていくことです。

子どもが、黙々と土を握って「これ、たこやきなの」と差し出してくれます。その行為を通して、手の中で土をすっかり感じ、手を広げて見えた形からイメージを広げて考え、そして近くにいた私に「見て」と差し出しコミュニケーション（行動）を取るのです。

人に言われて感じるではありません。子どもは子ども自身の感覚器官を充分に働かせることから始めて、考え行動していきます。大人はどうしても子どもの行動を見て判断します。ですから「……ならないように」と転ばぬ先の杖つえを考え、制止したり指示したりしてしまいがちです。しかし、危険が伴わない限り見守っているのは、自分で感じることを大

切さを体中で感じられる子ども（人間）に育ってほしいという願いがあるからです。転ばぬ先の杖は子どもを「大人の顔色を気にする子」や、「指示待ちっ子」に育ててしまいます。「土・砂」に触れる保育の効用をもっと見直してみませんか。

さらに付け加えると、年齢に関係なく（つまり大人でも子どもでも）心持ちはクルクル変わるものです。うれしくなったりムシャクシャしたりと、日によつても時間によつても変わるものです。昨日は心地よく感じられたものでも、今日は触りたくないということもあります。

そうした情緒が不安定なことは、誰にでもあります。また激しく怒ることもあります。そうした情動に駆られることは、人間にとつて当たり前のことです。その心の情動を、どのように解決できるか試す機会を保障することが重要です。今日的な事件でわかるように、自らの情動の制御が苦手な大人が増え

ていることは事実です（そういう大人に育ってしまったのです）。

つまり衝動や情動をうまく吐き出す術として、もとかかわることが苦手なのでしょう。たとえば、たいていの人はイライラして紙を破いたことがありますね。思い切り破いた後はすっきりします。絵の中で、思いどおりに描けないときに塗りつぶすというの、何らかの想いを吐き出している行為です。そうしたときの紙やクレヨンが、こちらの言いなりになってくれるから気持ちやすっきりするのです。

つまりこちらの想いに応えてくれる性質＝可塑性の高い素材とのかかわりこそ大事なのです。だからといって破壊的なことを奨励しているのではなく、物に気持ちをぶつけてすっきりして心を取り戻すと（ものにも心にも）新たな発見が待っています。前向きになれるのです。その意味からも、可塑性の高い素材として「土・砂・粘土」の魅力は重大です。

「土」Ⅱ「大地」を意識する

「土」の見方を変えて、「大地」つまり地面について考えることも、子ども理解につながります。

子どもたちは絵を描くのも大好きです。周りの大人たちや兄弟に恵まれれば、一歳になる前から描き始めます。初めはスクリブル (scribble) ・よく「なぐりがき」と訳しますが、子どもなりに意思や意味があります」という線を描きます。スクリブルの線描きが直線的だったり曲線が増えたりし、画面に拡散したり集中したりして、やがて独立した円が描けるようになっていきます。さらに円を中心に形が組み合わさってさまざまな図形が生まれてきます。そうした絵の変化と共に、子どもたちは描きながらイメージを広げ、意味を付けていきます。

そうした子どもの絵の表現を観察していると、「土」で触れたお団子作りで、できたお団子を並べるよう

に、積み木やままごとの遊びでも、いろいろな物を並べていくことが多く見られます。それと同様に絵の中でも円や図形を並列的に（といっても水平ではありませんが）描くようになります。

やがて画面の下のほうに、一本の水平に伸びる直線（基底線と呼ぶ）が描かれるようになります。一本の……と言いましたが、二〜三cmの幅で塗ることもしばしばです。

そうした表現は画面の約束事、「こっちが下」を意味しています。つまり子どもは、地面の存在をはっきり認識しだすのです。上は空、太陽は空を表すモチーフで、雨の絵を描いても太陽を描くこともあります。



▲子どもの絵と基底線

そして地面の上には自分が知っているものや好きなきなものを並べて描きます。地面と空の間には何もないという考えです。つまり、大人のように奥行きや重なりは見えていても、見えたとおり表現しない絵を描きます。しかし、確実に「大地と自分との関係を獲得」しています。たった五年間(早い子で四歳過ぎですが)生きてきて「己を悟る」のですから、子どもとはいえ立派なものです。

ここでも、「転ばぬ先の杖」が登場してしまいがちです。「顔はこう描くの」「バックは塗るのよ」などと大人の考えを押し付けることは、子どもの発達を損ねます。損ねるばかりではなく、「自分で感じて考えて行動する」という原則に反します。さらに子どもの立場になつて考えると、自分で考えて描いたことを否定され、さらに「こう描け」と言われるのですから、心が傷つき「描くのは苦手」と思ったり、自分の意見を言わなくなったりしてしまいます。家

庭ばかりではなく、保育現場も反省が必要です。

その「基底線」が出現してからのことではなく、すでに子どもたちは、並べて描くことで意思を表しています。先にも書きましたが、子どもたちは積み木やままごとの遊びでも、本能的に物を並べたり重ねたりしています。そうした姿は絵を描くときにも見られます。

まだ研究途上のことで細かいことは不明ですが、約五百人の子どもたちを追跡調査して、約八千五百枚の絵を調べた結果、「基底線」と「並列に描く絵」との関係がわかってきました。「基底線を獲得」する前は、ほとんどの子どもが並べて描くことをしている……という事実です。

さまざまものに触れて、感じ考え、行動することが、子どもを子どもらしく、人として育てる要だといえます。そのことが「土」からの恵みだと感じます。

(十文字学園女子大学)